

## 身近な動植物が帰ってきた (?)

### 2015年異常気象で復活したり衰退したりの印象

大賀 二郎 \*

このレポートは、この夏の異常で人の居住域で生存している身近な野生動植物にどのような影響があったか、個人的な印象で観察したものである。どのような種類がやってきたか、いなくなったか、発生、生態に影響があったかを断片的に観察した。2015年夏の記録だけで時系列はない。地域は甲山南山麓の西宮市甲陽園目神山町、山王町のあたりで、海拔 250m 前後の住宅地である。自然林も溪流も残っている。この地域には土砂災害警戒区域があり、台風11号の時も避難勧告が発令された。

2015年 7月16日夜室戸市付近に上陸した大型で強い台風11号は17日朝から17日午後にかけて日本列島を縦断した。神戸市、西脇市、三木市、西宮市、神戸空港の兵庫県内 5 地点の24時間雨量 212~278 mm であり、それぞれ観測史上最多を記録した。11号通過後は8月中旬にかけて 12, 15, 18号の台風の日本上陸もあったが、以降は概して太平洋高気圧に覆われた。日中猛暑熱帯夜の日が多かった。近畿 2府 4 県の場合を例にしても連日高温度注意報が発令されることが多く最高温度 36 度前後になっていた。気象も不安定で、豪雨、落雷、突風、竜巻などの発生などもあった。これは8月下旬まで続いた。2015年 1月から12月まで台風が発生した。

こうした異常気象によって相当長期の間、姿が見られなかつた小動物が意外にもこの夏あたりから部分的に見られていた。今年の天候の急変が小動物の活性に繋がつた可能性がある。昔は町のどこにでもいたスズメが帰ってきた。今また群れで飛んでいる。

初夏の風物詩ツバメもやってきた。街の中央にあるツマガリ洋菓子店の仕事場通路の天井にツバメの巣を見つけた（図 5）。買い物客の頭上をスーと一羽帰ってきた。東南アジアのどこかの島から数千キロの旅をして飛んで来るといわれている。ここで雛が育つてまたその地に還つて行く。向うの地にも決まった巣があ

るのだろう。太平洋を隔てて愛の架け橋になっている。ツバメによって双方の人の愛が通じている。人と小動物のささやかな交流である。

台風通過後まず蝉が鳴き出した。山林はアブラゼミ、市街地はクマゼミ、8月後半、山間渓谷はヒグラシ、ミンミンゼミ、ツクツクボウシだ。いずれも例年には多数だ。特にアブラゼミ、クマゼミは特定の箇所で集中羽化が見られた（図 9）。ニイニイゼミは今年に限り姿が見えなかつた。アブラゼミの多量発生を狙ってきたキイロスズメバチが異常発生している（図 4）。トンボの類はオニヤンマ、シオカラトンボ、ナツアカネから小型のイトトンボ。渓谷にハグロトンボが飛んでいる。このためか蚊の発生数が幾分抑えられているようだ。食物連鎖はいろいろのところで起きているようだ。腐葉土の上でマイマイカブリがいる。肉食性だ。街灯に集まる小昆虫をねらってヤモリが窺っている。相手はスズメバチ。その恐ろしさを知らないのだろう（図 6）。例年はほとんど見られなかつた直翅類が見られた。葉を食害するフキバッタの一種を見つけた（図 1）。『バッタ・コオロギ・キリギリス大図鑑』（北大出版会 2006）で調べてみると、分布には兵庫県の記載はないが、ヤマトフキバッタによく似ている。

虫が鳴いているとは、昔はコオロギ、キリギリス、スズムシなどの直翅類のことだった。今年は見られない。虫が鳴いているとは、今では蝉が鳴いていることを意味する。成虫になりきれず死亡した多数の蝉が林中で見られた。蝶類ではクロアゲハ、アカタテハ、ルリタテハ、ツマグロヒョウモン（図 2）、ミスジチョウなどが市街でも普通。蛾の類も多い。スズメガ、シャクガ、ホタルガ、カノコガが発生している。

昆虫の遺体が各所に見られる。蟻の行列が随所で見られた。混ざつてアリグモがいる。また林中にクモの巣が多い。

子どもの間で昆虫の飼育熱が盛んである。カブトムシで従来分布の知られなかつた地域に多量にいる。野生復帰したものかもしれない。鷺林寺付近にこの例が見られる。

\* 森羅万象の館 博物館学芸員  
2016年3月22日受理

カラスは各地の住宅地で大量に発生している。住宅の廃棄物を荒らし、小動物を食害している。かつての夕空の渡り鳥、巣に帰るコウモリ、トンボの群れが懐かしい。昔の風物詩が見られなくなった。

野生植物ではタカサゴユリが各所の空閑地で開花した(図8)。懐かしい月見草も見られる。夙川から有馬に向かう交通量の増加が種子を運んだのかもしれない。天候が不順だったためか茸類が発生している。花崗岩崩壊土壌にチャダイゴケの一種の群生が見られた(図3)。

住宅地では昔の温室植物だったシンビジウムやアンスリュウムなど温暖化の影響か花壇で植栽され、越年している。

地球環境の変化で近年小動物の減少が懸念されていましたが、今年は馴染みの生物が姿を見せている。異常高温にも影響がありそうだ。この現象は一過性のものか、また新たな傾向がでているのだろうか。今のところまだわからない。モリアオガエルがおたまじやくしから親になるのが今年は早いようだ。十分に成長していない(図7)。

今回の観察記録はツバメに関する箇所はツマガリ洋菓子店、甑岩自然観察の会、タクシー乗務員、その他は近隣の方々のお世話をいただいている。筆者は当地に20数年居住している。イノシシは目神山町の住宅地内でよく目撃される。子連れもいる。哺乳類は今回の異常気象で今のところ大きな被害はないようだ。

9月8日の甑岩の集会で神社の南(神域外)でシカ一頭の目撃報告があった。甑岩神社と阪急苦楽園駅の中間の土手あたりで、箕面山中、神戸市北区でも目撃例がある。

本稿記録中も国内各地で環境異変が続いている。茨城・常総で想定外の集中豪雨が続いている。

2015年は未曾有の天候異変を記録して暮れようとしている。人間の生活圏の身近な動植物にはどのような影響があったか、六甲山麓での局地的、かつ、断面の報告である。

一部の小動物はその災害に際して助け合い避難し、欠乏時の採食の行動をとるなど共助本能があるのでないか。今後の課題としたい。



図1 フキバッタの一種(ヤマトフキバッタ?)。フキバッタの仲間は成虫でも翅が幼虫のように短い種が多い。



図2 春先から普通に見られるツマグロヒョウモンの♀。



図3 花崗岩で突然発生したチャダイゴケの一種。



図4 アブラゼミを襲うキイロスズメバチ。



図5 カラスが嫌う金属のそばに巣造りしたツバメの巣。中央泥状のもの。



図6 スズメバチに近寄るヤモリ。

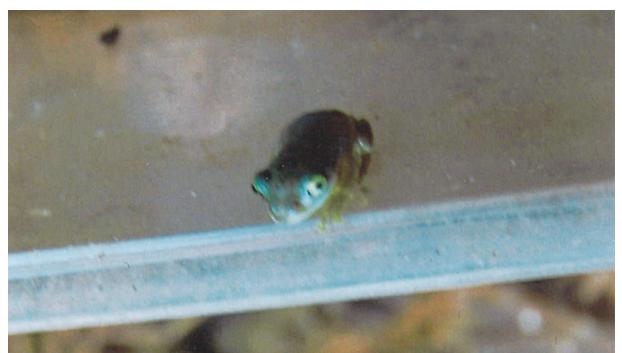


図7 モリアオガエルの幼生。十分に育っていない印象。



図8 自動車の普及で道路沿いに種子が伝播されるタカサゴユリ。最近よく見かける。

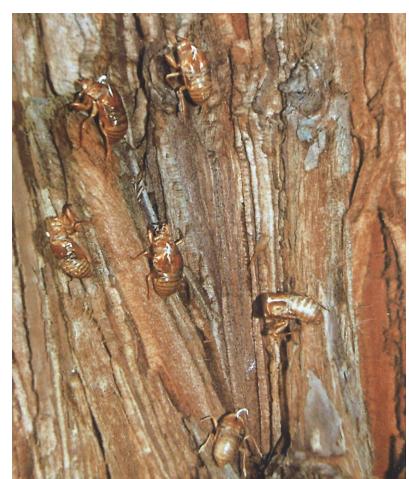


図9 アブラゼミの羽化殻。羽化殻についている白い糸状のものは羽化したときの気管の殻で、これがないものが羽化に失敗して死んだものだ。